

観たい 知りたい 光り輝くとよがわ流域

～めざそう観光リッチ(立地) (Rich)～

広域観光・歴史文化グループ

中村秀夫・久米英雄・谷野重夫・高木松生・鈴木孝夫・山本春美



I 事業の目的

とよがわ流域地域全域にある様々な観光資源の掘り起こし、また新たな再発見、再利用し、また今までとは違う組み合わせの観光プランなど、箱物的な発想ではなく、ソフト重視の観光立地的思想の確立をこのとよがわ流域地域で目指す。また、この観光を呼び水に、地域内の交流、そして地域外との交流を活発化し、とよがわ流域地域の一体感の醸成や地域全体の知名度獲得を目指すものである。

「観光リッチ」の意味

今回のサブタイトル「観光リッチ」には以下の意味で付けたものである。

1 歴史文化的な観光資源の再発見と再活用で心の「Rich」

とよがわ流域地域の隠れた歴史文化や祭事などを再発見し、また、流域地域の様々な人々が体験や参加しやすい状況を作り、地元住民との交流と理解に繋げ、今までとは違った血を導入することにより祭事、イベントの活性化と歴史文化施設などの活性化に繋げ、こういった参加を促すことにより、地域社会への貢献や、歴史の担い手としての「自覚」を促し、物質文化ではない、精神文化としての歴史文化から受ける心の豊かさを意味する。

2 観光による経済的な「立地」

従来は箱物重視の観光が主流であったが、現在あるものを利用し尽くしてやることから初め、これまで連携してこなかった業界とのコラボレーションにより相乗効果をあげ、点から線、そして面的な連携をし、国内交流までを視野に入れ、従来型の観光の枠にとどまらない経済波及効果を意味する。

3 上下流域の相互理解の促進による新たな「豊かさ」(Rich)

観光というお互いの住む地域へ入るきっかけを入り口に、とよがわの上下流住民の交流に繋げ、歴史的にも、物質的(水や農作物など)にも深い繋がり理解を広げ、21世紀のとよがわ流域地域住民への意識醸成に繋げ、新しいお互い様主義、新しい豊かさの構築を意味する。

II とよがわ流域地域における観光の現状の分析と課題

現在、この地域は東三河と行政区割りされている。また、浜松市や長野の飯田市などの地域と共に三遠南信とこの地域は呼び、県境を超えての連携を模索している。しかし、現状、昨年の講座の先輩方のアンケート結果からも見えるが、このとよがわ流域内での住民交流や情報交換・交流が思っているほど進んでいないのが実情である（参考資料1）。この結果の主な原因とも思われるとよがわ流域の各地、各自治体の情報の発信力の低さであり、また広域広報媒体の少なさは意外に知られていない。

今回の講師でもあり、フィールドワークで訪ねた三重県 伊勢市が河口の宮川流域では、流域全体をカバーする広報誌が年4回発行され、流域住民への情報公開が進んでいる。

しかし、とよがわ流域にはこういった広報誌が無いのも上記の流域住民の無関心、交流の少なさに繋がっているのではないだろうか。

また、この表は検索サイト「ヤフージャパン」のニュースカテゴリでのニュース記事の検索結果であるが、これはこの地域の情報がネット上に非常に少ない現状を表している（2008.2.11 検索）。これはこの地域がネット上での全国への情報発信力が少ないかの一つの指針となる。

また、パンフレットといった従来型の広報のツールにも様々な問題点がある。ハイキングコース紹介のパンフレットでは危険なコース、箇所がそのまま載っていたり、また、事実とは異なる記述や施設や史跡の位置の間違いが意外に多いのである（例えば、「長篠の戦い」の記述間違い）。

表1 とよがわ流域自治体のニュース記事の検索結果

とよがわ流域	ヒット数	自治体	ヒット数
豊橋市	37	中核市(県内)	
豊川市	12	豊田市	49
田原市*	45	岡崎市	14
愛知 田原市	21	中核市(県外)	
新城市	2	旭川市	20
蒲郡市	8	函館市	21
湖西市	5	宇都宮市	88
小坂井町	4	水戸市	61
設楽町	1	船橋市	55
東栄町	2	富山市	64
豊根村	8	宮崎市	131
		和歌山県内	
		和歌山市	200
		田辺市*	353
		和歌山 田辺市	340
		日高川町	13
		北山村	18
三遠南信自治体	ヒット数		
浜松市	78		
飯田市	14		
泰阜村	6		
天龍村	9		

*田原市の結果は「小田原市」「大田原市」と混在していたので「愛知 田原市」でも「検索」した。「田辺市」も同様の理由で分けている。



図1 「長篠の戦い」の記述間違い(冊子25ページ)

表2 とよがわ流域各自治体の観光パンフレットのテーマ別、発行者別の一覧

テーマ別

	歴史・文化	温泉	食	名産(土産)	自然(景観)	祭り	美術・博物館	その他
豊橋市	1	1	2	3	1	1	1	2
豊川市	8	1			8	6		2
蒲郡市	2	3	2	2	1	2	2	
新城市	12	2		2	6	1	1	6
田原市	4		4	3	4	4	3	
設楽町	1	1	1	1	1	1	1	4
東栄町	1	1	1	1	2	1	1	1
豊根村	1	2	4	4	4	1	2	2
小坂井町	2					1		
湖西市	2			1	2	1		1
広域団体等	8	1	3	3	5	3	2	2
総計	42	12	17	20	34	22	13	20

発行部署別

	観光課	企画課	教育委員会	経済/産業課	観光協会	商工会	民間	その他	総計
豊橋市	2				3				5
豊川市	3	1		2	1	1		2	10
蒲郡市		1			1	2			4
新城市	1		9		7	1		2	20
田原市		2	2		5	3			12
設楽町					4				4
東栄町		1		1					2
豊根村				6					6
小坂井町		1	1						2
湖西市		1	1		2				4
広域団体等		1			2		2	7	12
総計	6	8	13	9	25	7	2	11	81

また、以下にこのとよがわ流域の各市町村の「観光パンフレット」のテーマ別、発行者別に分けたものがあるがいろいろ見えてくるものがある。

ここから見えるのはこのとよがわ流域では既にさまざまなものがあるということがわかる。改めて「この地域には豊かな観光歴史文化がある」ということを実感するものである。しかし、文化財などのマップ、パンフレットは主に教育委員会など、文化施設自体にあり、せっかく作ったパンフレットが気軽に観光客や市民、住民には手に渡らない現状がある。現状は情報拠点が、その数や質が住民のニーズにできていないとも言える。

Ⅲ 提案事業

(1) 事業の方針

現状分析から見えてきた「広報」「広報媒体」「ソフト力（企画能力）」「既存施設のデータ不足」などの問題点を解消し、とよがわ流域内の観光、文化施設のさらなる価値の創造を目指す。それには「基礎調査」「企画実践」そして「進化発展」となる活動が必要となる。

① 1年目「基礎調査」

とよがわ流域地域のさまざまな分野の情報を集め、また、その情報のチェックとして、たとえば既存施設のチェックなどをし、現状の問題点を明確化する（徹底的な「基礎調査」の一例として「参考資料2 とよがわ本架かる橋」を参照）。

※他の住民団体と連携し、「既存施設チェックツアー」の実施。

※基礎調査の徹底と各関係との連携。

② 2年目「企画実践」

「基礎調査」で得られた情報を元にとよがわ流域全体の新たな観光マップやガイドを作成する。また、上記のものから派生したモデルコースのツアーの企画やモデルコース自体の公募をし、住民全体で考えるきっかけも作る（そのスポンサーも募集する）。

※観光モデルコース公募の募集と発表、実施。

※観光マップ&ガイドの作成と発表

③ 3年目「進化発展」

1年目で集めた情報を「点」とし、2年目でそれを「線」にし、3年目ではそれを「面」にする。また、公募した観光プランの実施も視野に入れる。観光系の業界への売り込みなど、営業活動、広報活動も視野に入れる。HPなどの「IT」の本腰入れた活用と、廃校舎や統合閉鎖された施設などの観光拠点としての再活用などし、またイベントを仕掛けて全国的な知名度を目指す。

※とよがわ流域検定（仮称）の企画

※従来の観光パンフレットの置かれている場所の拡大（設置チャンネルの開拓）

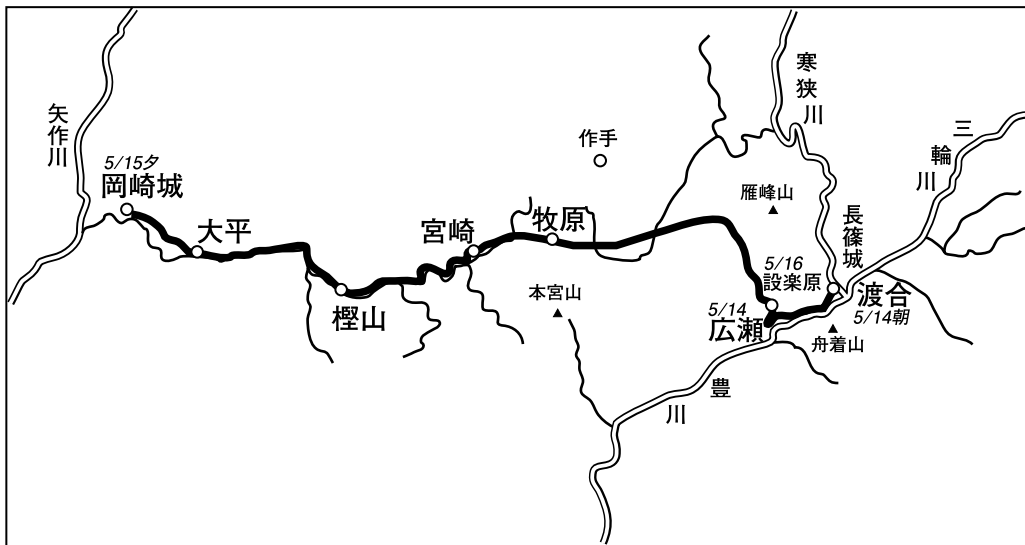
※山城サミットへの自治体参画の呼びかけ

表3 行動計画表

	テーマ	行動
1年目	基礎調査	流域の基礎調査の徹底 関係各所との連携 既存施設チェックツアーの実施
2年目	企画実践	新たな観光マップ&ガイドの制作 モデルプランの発表 「モデルコース」の公募 スポンサーの確保
3年目	進化発展	既存の観光情報拠点の改革 新規の観光情報拠点の開拓 観光パンフの配布拠点の増 「線」から「面」への移行促進 例：とよがわ流域検定(仮称) 全国山城サミットの活用等

例1 鳥居強右衛門歴史ロマン街道(仮称)

長篠の戦いで有名な伝令役、鳥居強右衛門が辿ったルート(長篠～岡崎)に絞り、彼が走ったであろうルート(約50km)沿いの「歴史」「文化」「観光施設」などを網羅した「ガイドブック」作成し、その沿線住民は元より、「観光客」にも今までとは違った切り口の観光ルートを提供する。



往路：渡合—広瀬—連吾川—雁峰山—牧原—宮崎—檜山—大平—岡崎城
復路：岡崎城—大平—檜山—宮崎—牧原—雁峰山—設楽原

鳥居強右衛門の長篠～岡崎往復予想図

資料：「現代に生きる戦略・戦術 長篠の戦い」(旺文社 1984)を一部改変(久米作図)

例2 手筒花火体験プラン

現在、「氏子」などに限定されている「手筒花火」をもっと身近にする為に、小さな手筒花火の作成体験や、「打ち上げ」限定の体験プログラムなどの作成をし、流域内外の「手筒」体験希望者やファンを増やしていく。また、他の体験プログラムや名所とコラボレーションし、打ち上げた後「温泉」など流域全体との連携も幅広く可能になる。

例3 「とよがわ流域名産食べ尽くしプラン」

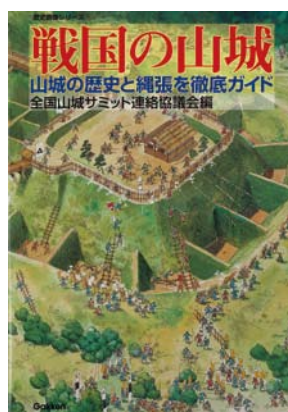
「朝」「昼」「おやつ」「夜」に合わせた食べ歩き的なプラン。例えば、朝、豊橋でモーニングサービス、昼前にあつみのメロン、昼に湖西でウナギ、おやつに鳳来寺で五平餅、夜は湯谷でシシ鍋といった形。

また、こういった食べ歩きプランも公募し、制限として各自治体1ヶ所などを入れたら様々な意見が集まり、とよがわ流域として「面」的な広がりが見込まれる。

※観光モデルプランではないが、このとよがわ流域の歴史資産でもある「城跡」の価値を高める案として「全国山城サミット」への参加を各自治体に呼びかけるのも有効と思われる（サミット参加により、全国的な参加自治体との交流もすすみ、広報PRの面から観ても一石二鳥以上のものがある）。これもある意味広域観光的な「面」の広がりといえる。



第14回全国山城サミット



戦国の山城(学習研究社発行)

「全国山城サミット」…「地域に根ざした山城の保存と活用」を主眼に全国69の自治体が集まり、歴史的文化遺産である「山城」をPRし、お互いの交流にも繋げている。現在、91の「山城」がサミット参加リストに名を連ねている。愛知県はどの自治体も入っていないが、近隣では「浜松市」が加盟している。また、この91の山城の詳しい紹介の「一般書」が学習研究社からも発行されている。

(2) 事業効果

本事業を実施することにより、以下の効果が期待できる。

1. 地域観光資源の再発見、再利用、史跡の保存

埋もれている「史跡」などの歴史資産や隠れた観光資産を掘り起こすことにより、住民がその存在を認知することになり、再活用にもつながる。また、その史跡の保存活動などに発展する可能性が高い。さらに、国際的な観光の広がりを考えて、パンフレットや施設の説明など、まだまだ足りない他の外国語版などの整備し、新たな観光客受け入れに繋がる。

2. 地域住民同士の交流の促進

市民活動などのボランティアというイメージがあるが、観光というテーマなら気軽に参加出来る。また、昨今盛んな体験観光など、住民との触れ合いが必要なプログラムなどは、お互いを知る良いチャンスであり、理解が深まる。

こうした体験観光プログラムの情報の整理は流域外からの修学旅行誘致にも繋がる。

3. 観光の人材のレベルアップ、育成

こうして集めた資料、情報を基にご当地検定などを開催し、流域住民にもっとその歴史や文化に親んでもらい、こうした検定の上級者には観光ガイドなどになってもらうシステムなどを構築することにより人材育成や現在地域の観光に関わる人材の底上げにも繋がる。

4. 流域地域情報の整理により、今まで以上の広報 PR 効果の増進

とよがわ流域の情報の整理により、効率よく流域圏以外の人々に説明でき、広報や地域の売り込み営業などにも今まで以上に効果を期待できる。

(3) 事業遂行にあたっての問題点

事業遂行にあたっての問題点はいくつか考えられる。

1. とよがわ流域の情報資産の吟味と裏付け、日本国内の観光の国際化に向けての対策

現在でも、各種パンフレットだけでなく、出版社からの発行物にでさえ間違いがあるが、これはとにかく時間を掛けても正確さを心がける。また、今年10月からスタートする「観光庁」など、国が国策としての観光客誘致が進んでいる。最近でもセントレアで施設の利用のしやすさなど、在日外国人の人たちにチェックを依頼したということがあった。

この地域でもこういったチェックを各自治体の国際交流協会などと連携をとり、薦めることも重要である。パンフレットの各国外国語版や展示物の説明の各外国語版など、こうした点でも協力が必要不可欠である。

2. 実際の制作などに掛かる経費などの捻出の問題

これは蒲郡などの自治体が広報のスポンサー枠などでいくらかの経費を捻出しているが、こういった点や国などの補助金なども考慮しながら醸成金の獲得を目指す。

3. 作成した新たなパンフレット、ガイドブックをどうやって利用者の手に渡るようにするか

現在、観光パンフレットは「決まった場所」にしかない。これは「利用者」が自分で取りに行かなくてはいけないが、これをもっと利用者、観光客に近づけていかななくてはいけない。また、こういった「情報拠点」が少ないのも問題であり、廃校舎など、施設の「再利用」など積極的にする必要がある。

例えば、新城市のあるガソリンスタンドが「観光パンフレットあります」と看板に掲げているが、こういったガソリンスタンドやトヨタなどの自動車販売の店に「観光パンフレット」のコーナーなどをお願いするのも重要な販促であり、広報活動である。

4. 広域全体を対象にしたプランの実施における問題

「既存施設のチェックツアー」「観光プラン公募」「とよがわ流域検定」など、実施するにはどうしても愛知県や東三河の各自治体や湖西市の協力が必要であるが、例えば、愛知県などが行っている文化施

設などへの行政バスツアーなどに組み入れてもらったり、参加募集や公募呼びかけにも広報配布システムを利用できるようにするといった形をとることも考えられないであろうか。また、検定の問題などの選定などに各地の教育委員会などへの協力も欠かせないが、こういった検定などを行う主催団体の設立も視野に入れる必要がある。

やはり流域広報誌など、従来の行政枠を超えた広報誌など、住民の意識改革にも必要である。

IV おわりに

今回、私たちのグループは「広域観光・歴史文化」がテーマであるが、調べるほど、この「とよがわ流域」には「豊かな歴史」と「文化」があり、また、豊富な「名産」「農産物」があり、非常にバランスのよい地域と感じた。しかし、上流域の「奥三河」では過疎進行のため、伝統民俗芸能文化である「花祭り」の存続に影を落とし、また「集落」自体の存続すらも危うくさせている。

こういった問題が下流域の「都市部」ではあまり真剣に論じられることも少なく、また、「へえ～過疎？いいじゃん、都市部に引っ越せば？」という短絡的意見がネットなどを中心に若い人々に広がりを見せている。簡便さを好む意見であり、豊かさの本質を見失いかねない意見である。

人が少ない山間地ほど「情報発信」が少なく、なかなか上流山間地のよさ「真実」が伝わりにくいし、理解されにくい。

少子高齢化と都市集中化といった問題に「観光」が出来ることなどはあまり無い、というイメージがあるが、観光は観光でこういった問題へいくつかアプローチができる。それは「観光」を一つのきっかけにして、「住民交流」をはかる。また、観光をきっかけにしてのその地域の「歴史文化」を知る。そして、その土地と土地の繋がりを知ることが出来る。「市民活動」「ボランティア活動」というと、何か他人のためによいことをしなければとか、社会還元とか貢献とか思われ、学ぶことを強いられるとって敬遠されやすい。

しかし、「観光」という形ならどうだろうか？これなら「敷居」が低く、観て聞いて楽しみながらその土地のことを知ることが出来る。その土地のことを知るきっかけづくりには「観光」というツールは非常に有効である。こうして地域を観光し、感動した人は、そのまま「広報」の役を帰ってからしてくれる。そう、「口コミ」という名の重要な「広報媒体」となりうる。

このように、今の世の中何が当たるか「判らない」もの。従来の「観光」ではない、新たな「需要」に対応するためにもこの流域の情報が必要不可欠であり、また、整理しなくては他人に伝わらないものである。

今回の発表のタイトルである「観たい 知りたい 光り輝くとよがわ流域」、これは流域住民に「地域の誇り」という意識を持ってもらいたいという願望も入っている。豊かな「歴史文化」をはぐくんできたとよがわ流域でお互いを知らないが故に意思の疎通がなされていないのは非常に残念である。やはり母なる川「とよがわ」、そしてその流域のこれからの「歴史文化」を継承するためにもどんな形であれ興味が沸くようなこと、観光であれ、行事であれ、考えていきたいものである。

参考文献

各種自治体の観光パンフレット、ガイド

「ヤフージャパン」<http://www.yahoo.co.jp> 2008年2月11日検索

「宮川」宮川流域ルネッサンス協議会

「和歌山 県民の友」和歌山県

「戦国の山城」学習研究社

「第14回全国山城サミット三原大会」三原市サミット事務局

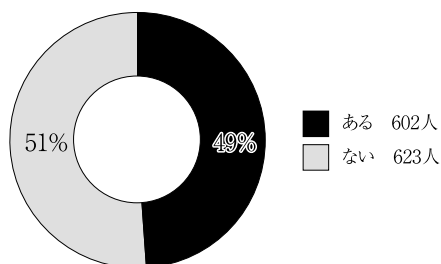
「2006年度とよがわ流域大学修了生グループ共同提案事業成果報告書」

参考資料1

流域圏について(問11～問17)

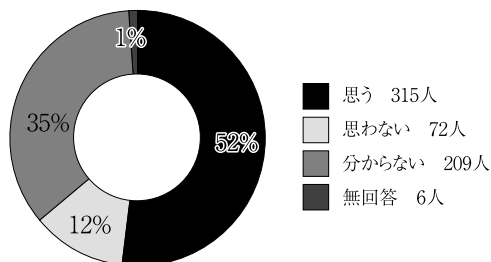
1. 聞いたことあるか：

「ある」が49%、「ない」が51%。「ある」では公務員が81%と多く、少ないのは学生の12%であり、在住期間が15～20年の人も18%と少ない。5地域はいずれも50%強は「ある」と回答している。



2. 内輪として支えあえるか：

「支えあえると思う」が52%、「思わない」が12%、「わからない」が35%。「思わない」では林業の方が33%と多い。「わからない」では学生が67%、パート・アルバイトが54%、林業が50%と多い。地域別では、「支えあえると思う」が旧津具村で66%、旧新城市で58%と多く、旧設楽町は42%で少し少ない。

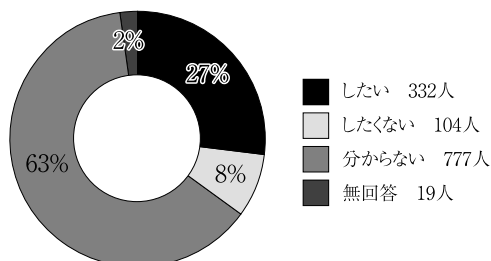


3. 支えあえると思わない理由は：

下流域の人には「水の恩恵」に対する感謝の気持ちが見られないから、という意見が多かった。

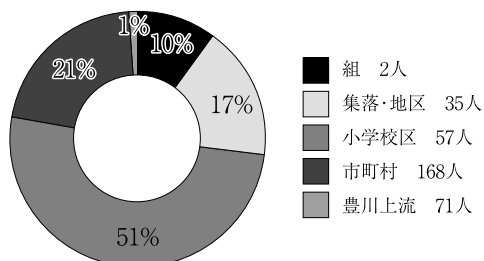
4. 下流域民と交流したいと思うか：

「したい」が27%、「したくない」が8%、「わからない」が63%。「したい」は団体職員が47%、農業が45%、林業が44%と多く、「わからない」は学生が81%と圧倒的に多い。地域別では旧津具村が「したい」が39%で他地域より多い。



5. どのような地域単位で交流ができるか：

一番多いのが「市町村単位」で51%、次に「豊川上流域単位」で21%、「小学校単位で」が17%となっている。林業の方は一番は「豊川上流域単位」で75%、地域別では他地域に比して旧鳳来町は集落・地区単位20%や小学校単位18%、旧作手村は小学校単位34%が多い。



6. 下流域民と交流したくない理由は：

主に、交流する興味、目的、必要性がないという意見であった。

2006年度とよがわ流域大学修了生グループ共同提案事業成果報告書(p37-38)より引用

参考資料2

豊川に架かる橋

H19(2007)年11月現在

	名称	管轄	竣工月日	長さ(m)	幅(m)	備考
1	無名の橋	設楽町	平成3年3月	40.0	1.0	
2	大名倉橋	設楽町道	昭和42年1月	21.9	4.7	
3	松戸橋	設楽町道	昭和33年6月	39.6	4.4	
4	平野橋	設楽町	昭和5年5月	106.1	4.0	平成10年改修
5	箱上箱(弁天橋)	設楽町道	昭和5年5月	81.2	4.0	平成10年改修
6	田内橋	設楽町道	昭和33年3月	40.9	6.9	
7	新清嶺橋	国257	昭和59年3月	89.0	9.8	
8	清嶺橋	設楽町道	昭和40年9月	43.8	3.9	
9	新竹桑田橋	設楽町道	昭和56年1月	49.0	4.8	
10	田峯橋	鳳来設楽	昭和54年3月	98.5	9.8	
11	竹桑橋	設楽町道	昭和34年3月	44.0	4.3	
12	市代橋	設楽町道	昭和7年7月	36.0	4.7	昭和14年3月改修
13	島原橋	保永海老	昭和14年3月	48.4	3.7	
14	源氏橋	国257	昭和5年5月	43.5	4.7	
15	只持橋	国257	昭和5年5月7日	80.8	5.0	
16	出合橋	新城市道	昭和6年6月	40.0	4.0	
17	小松橋	国257	昭和5年5月3日	74.7	4.5	
18	寒狭川頭首工	水資源機構大野管理所	平成9年3月	93.0	4.0	
19	椎平橋	新城市道	昭和58年頃	74.0	4.0	
20	寒狭橋	新城市	昭和5年3月	76.0	5.5	
21	寒狭大橋	国	平成8年3月	188.0	10.0	
22	猿橋	新城市	大正3年	9.0	1.0	
23	長篠橋	新城市	昭和9年3月	80.0	5.5	
24	長篠大橋	国	昭和62年3月	110.0	12.0	
25	飯田線橋	JR	明治30年	79.3	4.9	
26	牛淵橋	新城市	昭和5年	113.0	5.5	
27	水管橋	水資源機構	平成20年	79.0	2.0	豊川用水東西分水工
28	早滝橋	新城市	昭和32年	70.0	3.6	昭和45年改修
29	弁天橋側道橋	県	明治42年	98.0	5.0	大正10年・昭和8年・昭和33年改修
			平成4年3月	98.0	2.5	歩行者用と自転車用
30	笠岩橋	新城市	昭和47年	119.0	3.0	
31	新城橋	県	大正元年	170.0	12.5	昭和54年3月改修
32	野田城大橋	県	平成18年3月	350.0	15.0	
33	海倉橋	新城市	昭和42年	308.0	5.0	平成8年8月改修牟呂松原頭首工
34	江島橋	県	昭和13年7月	196.0	8.0	木造と鉄骨(江島駅側)
			昭和52年3月	301.0	11.5	架替
35	金沢橋	県	昭和35年	229.0	6.0	流れ橋(木造)
			昭和46年4月	309.9	8.0	架替・平成3年3月改修
36	東名豊川橋	道路公団	昭和44年5月	500.0	11.0	
37	加茂橋側道橋	県	昭和41年4月	332.0	6.0	
			平成7年4月	332.0	2.7	歩行者用と自転車用
38	三上橋	県	昭和30年4月	97.7	2.5	水潜り橋
			昭和55年11月	306.0	12.0	架替
39	水道橋		平成5年3月	387.0	4.0	
40	当古橋	県	昭和9年3月	304.0	12.0	昭和61年10月架替
41	下條橋	県	昭和53年4月	370.0	12.0	
42	吉田大橋	国	昭和34年10月	311.0	22.0	
43	豊橋	国	大正5年7月	147.0		
			昭和63年	186.0	9.75 × 2	架替
44	飯田線名鉄線	JR・名鉄	明治30年	249.3	1.5 → 4.7	昭和4年改良
45	東海道線	JR	明治21年	240.0	3.1 × 2	昭和47年改良
46	新幹線	JR	昭和39年	336.6	12.0	
47	上渡津橋	県	平成14年12月22日	305.0	14.5	
48	渡津橋	県	昭和5年12月	266.0	11.5	昭和38年9月架替
49	豊川橋	国	昭和58年2月	661.5	11.1	

(作成：鈴木孝夫)